

スタインベックの文学 (III)

——『チャーリーとの旅』と『アメリカとアメリカ人』を中心として

柿 沼 美 代 子

私は先ず最初『怒りの葡萄』でスタインベックの社会的関心が本質的には彼の社会的意識から生れたという以上に、大恐慌下にあえいでいた当時の時代的風潮に強く作用されたものであったことを明らかにし、次に『エデンの東』を取り挙げ、スタインベックの本質が個人主義に立脚した思想の中にあることを証明しようとした。人間は個の中に善悪両方の可能性を秘めていて、自己の責任においてそのいずれをも選択することができる、という、Timshell というヘブライ語によって示される思想は、彼独自の新しい解釈ではない。神の栄光のためにすべての娯楽を罪悪とし、華美、豪華を退けた閉鎖的なピューリタニズムを根底からゆすぶらせた、自由で人間主義的な傾向のユニテリアニズムの中にすでに見出されてきたものである。そしてスタインベックの世界には、十九世紀においてなおユニテリアニズムを信じ切ることのできなかったホーソンやメルヴィルなどが心の中に「闇黒の力」の存在を認めて、魂の救済に全力をあげて立ち向かわざるを得なかった——そのような暗さはない。そうした暗さの代りにある楽観的なものそして明るさは、しかし、ユニテリアニズムの粋をさえはみ出して、さらに放埒で、一見粗野と思えるほどに明るく、健康的なものになっている。『天の牧場』や『罐詰横丁』で見せたそのような世界は、たしかに、人間を一つの種 (species) と見て生物学的に生の条件を追いつめていったスタインベック独特の世界観となっているといえよう。

既に前篇で述べたように、ヘミングウェイのような帰還兵がそうであったという意味においては「失われた世代」の一人ではなかったが、あらゆるものの価値体系が新しく創造されなければならない社会状況にあった、という大きな意味においては、彼もまた「失われた世代」の一人であったのだ。そのような時代背景を持って個の追求に向かいながら、なお楽天主義的であり得たのは、何故であったのか。それは、たとえばフォークナーが混沌の相の底に「ヒューマニズム」という人間を人間たらしめているものの等質性を信じ、そこに人間性不滅の信念を得ることで楽観的であり得たのと同じ悟りが獲得されたためであったのか。それとも、彼の楽天主義はそのような必至の追求なしに得られた、もっと本能的で、ユーモラスともいえるような楽天主義であったのだろうか。そうとは言わないまでも、絶望の底からの熱烈な希求が逆説的に表現されたものであったのか。

このような問題を追求することを、小論の目的にしたい。スタインベックの本質を個人主義の中にあると考える私は、この追求によってその個人主義の深さや広さを見究めることができると思うからである。

その目的で、小論では『チャーリーとの旅』と『アメリカとアメリカ人』を中心に考察を進めたい。この二冊を選んだのは、旅行記やエッセイである為に、他の作品よりも生のままのスタインベックの声を聞くことができ、特に後者の作品は作者が1968年12月20日逝去する2年前

に出版されたものなので、この最後の作品に彼が辿りついた最高の思想があるのではないかと期待したからである。

『チャーリーとの旅』は、1960年9月から3ヶ月にわたって老プードル犬チャーリーを連れ、アメリカ再発見を期して、特別あつらえのトラック「ロシナンテ号」に乗って34州を見て回った時の旅行記であり、1962年に出版された。この本の出版の年に、ノーベル文学賞を授けられたこともあって、長い間ベストセラーとなった。「子供のころ、たまらなく何処かへ出かけたいとなると、大人は私に『大きくなれば、そんなにむずむずしなくなるよ』と言ったものである。年令からいって大人の仲間に入ると、中年になればおさまる、とのことだった。いざ中年になると、こんどは『もっと年をとれば、その病は治る』と言われた。いま58歳だから、これだけ年をとれば、大丈夫なはずである。ところが、病はいっこうに治らない。」という一節で始まるこの旅行記で、スタインベックは、^(注1)「要するに、私は自分の知らないこと[=アメリカに関して]を書いてきたのだ。ものを書く人間として、これは犯罪的行為に違いない。ところで、私の記憶ときたら25年間もずれがある。」と反省し、^(注2)そこで「私は、もう一度アメリカを見て、この怪物のような国土の再発見を試みよう」と決心して旅に出るのである。^(注3)

奥の細道への旅に出ようとする芭蕉を想わせるような書き出しに何らかの求道者的な姿勢を期待するのは私が東洋人である為なのかもしれない。が、とにかくその期待は、2頁後の「犯罪的行為」の処で早くも不安を感じ、国土の再発見までくると完全に失望を抱かざるを得ない。人間に接近する求道の旅ではなく、アメリカ再発見の旅にすぎないのか。しかしそのことは敢て問題にしないで読み進んでいくとしよ

う。ここで彼が出会った台風の来襲、チャーリーの病気、またところどころに見せる巧みな話術によるエピソードや旅のコースなどをここで克明に辿る積りはない。彼の思索は何に向けられたか。直接に目に触れる事物からほんの少しばかり奥に入ったところで、極く表面的な像を結ぶに過ぎなかったのではなかったか。それは現代アメリカの一面を浮彫りにすることはあっても、その奥に横たわるアメリカ性、さらにそれを超えて人間性といったものへ目が向けられることはほとんどない。わずか3ヶ月の間に妻を2度も呼び寄せ、友人を恋い、愛犬の病気に心を痛め、寒さを厭って孤独と郷愁の念に駆り立てられ、遂には「見る」ことさえやめてひたすら老妻を想うのである。これが求道の旅とはいわないまでも「国土再発見」の旅に出た彼の姿であった。「ものを書く人間」は物見遊山に出る人とは違って、「人間」を通して「生」への厳しい追求を行ない、それが自己への深い沈潜につながるべきであることは、恐らく東西の別はないであろう。ソーローがウォールデンの森で見せた、またホーソーンがしばし立ちどまりながら筆を進める時に見せた、あの厳しい自己への問いかけが必要であろう。残念ながら、4章から成るこの『チャーリーとの旅』にそれを見出すことはまったくできない。恐らくこの旅は彼が「見るのを止めた」と最後に率直に認めているところからも判断できるように、彼の精神を飛躍させるモメントにはならなかったと考えたい。

つまり、われわれがこの本でスタインベックが個への深い理解に到達することを希った期待は、完全に失望に変わる。それにしても、彼は、物語の上でも何と読者の期待を裏切りつつけてきた作家であっただろうか。怒りの葡萄がたわわに実って、当然何か正義が行われることを期

待せざるを得ないような切迫した時もそうであった。また『エデンの東』では認識を持ったキャレブの成長が期待された。『エデンの東』ではそれを跡づけるスペースがなかったとしても、スタインベックに求道者の姿勢を求めようとする者は、キャレブが達したあの延長線上に何らかの倫理体系が築かれるのを期待するであろう。それは人間性が危機に瀕した20世紀においてスタインベックを真に現代的作家にさせる最大の所以となるものであろう。古く良き時代の、上品な娯楽のための文学はいうまでもなく、運命論的、機械的純自然主義文学さえも生き残る余地のなくなった混迷の20世紀において、作家は、その傾向の如何を問わず、大なり小なりに「如何に生きべきか」を真摯に求めざるを得ない。それは20世紀作家の本質いや20世紀に限らず純文学を指向するすべての作家の本質であるに違いない。私たちは『チャーリーとの旅』の皮相的な思想の中に、そのような真摯なものを指向する積極的な意欲を、残念ながら見出すことができないのである。そこにあるものは、善良ではあるが、常識的で、しかも寄る年波に感性がやや衰えた一作家のセンチメンタリズムばかりである。セコイアの森で自然との合一を計ろうとする思索も、精々アメリカ人にまでしか拡がらず、それ以上の何らの価値をも生み出さない。

では、彼の最後の作品になった『アメリカとアメリカ人』の場合はどうか。

これは1966年専門家の手による多数の写真がつけられてヴァイキング社から出版された。著者は、序文で「このエッセイは、我々を非難するために作り出された、がさつなプロパガンダに答えたり、それを論破するための企てではない。それは客観的の真実とも言い得ないであろう。それは、言うまでもなく意見であり、推測

であり仮説である。どんなことをしてもそれ以外のものになり得る筈がないからだ。が、少なくともそれはアメリカを伝え、好奇心、我慢ならなさ、ある怒り、アメリカ及びアメリカ人に対する強い愛によってモチーフを与えられたものである。」と述べたあと、「複合体」、「パラドックスと夢」^(注4)、「人民の政治」、「平等性」……など9つの項目に分けて、アメリカ及びアメリカ人の特質を見つめている。そこには統一体としてのアメリカ国民が、数々の試行錯誤と誤ちを繰返しながらも、常に夢を捨てず、現実を切り抜けてきた知恵とエネルギーに対する讃仰がある。また機械文明がもたらした豊かさによって安易な生活に慣れてしまった現代のアメリカ人が、生の本質的な目標を失ってしまったために数々の墮落が起ってきたことに対する厳しい警告がある。こうした現状における種々の墮落の原因の糾明などの中には、たしかに一流作家の素質を想わせる、見解や鋭い洞察がある。殊に最後の章「アメリカ人とその未来」では、文明病とも言える「倫理不在性」がアメリカを蝕んでいる事実を深く嘆きそれを責任感の衰弱や、物に毒された現代人が豊かさに対して経験が足りないからだといひ、成功が破壊をもたらしたのだと分析し、何らかの解決策の必要を叫んでいるが、この章は現代文明諸国における共通の病いの根元を見事にいいあてており、恐らくこの書物の白眉と言えるであろう。そして彼の得た結論は、古いルールや指導理念が終焉を迎えたにもかかわらず、それに代る新しいモラルや理念がまだ見出されず、国民は亀裂に落ち込んでしまっている、だが今迄に数々の苦難を勇氣を持ってその度毎に切り抜けてきたアメリカ人は、今度もぎっと乗り切るであろう、という確信と希望を持つだけである。「我々は混沌とした変動の時期にある。我々は一度にあらゆる方

向に向って走っているようである——だが走っていることは間違いない。そして私たちの歴史、アメリカでの経験は、来たるべき変動に対処するだけの力を我々に与えていると信ずる。我々は決して長い間じっと何もしていないことはなかったのだから。一つの場所、一つの建物、自分自身にさえも、満足したことがないのだから。」という結びの言葉はたしかに強い信頼と期待^(注5)を表明している。しかしそうした信頼や期待が何となく浅薄で、一時の気休め的な感じを持たざるを得ないのは、一つには、彼がそのような信頼に至るプロセスやメカニズムを読者に示さないからであり、第二にアメリカ人が特殊な環境と素質を持った国民でありながら、その特殊性以上に普遍性を多く持った人間にすぎないから特殊性への吟味はやがて普遍的な吟味へと当然拡大されなければならないのであるが、この作品にはそれがない、ということである。

この事については、もう少しつけ加えなければならぬ。

アメリカ人に対する限りない愛情からの信頼や期待はあるが、それに至るプロセスやメカニズムがないために、その信頼や期待が浮き上がったものになってしまった事実は、上でも述べたように、このエッセイをひじょうに浅薄なものにしてしまっている。同国人に対して信頼や期待を持つことは、作家でなくても極く自然のことであろう。人間性の危機が叫ばれる20世紀において我々が必要としているものは、そのような楽天的で漠然とした信頼や期待ではない。問題は、そこに至るプロセスやメカニズムを我々の前に指し示すことである。これは恐らく人間に対する徹底的に真摯な追求態度によってなされるであろう。安易な妥協や抽象は許されるべきではない。この安易な妥協と抽象が結局「人の良い、陽気なアメリカ人」というスタインベ

ックのイメージを浮き立たせることはあっても、彼の文学を深く重厚なものにすることができなかった原因ではないだろうか。たとえば、『怒りの葡萄』であれほど強く同胞へのつながりを説きながら、余りにも早く抽象化を行ったので、「我々は団結しなければならない」というだけの結論になってしまった。そしてこの結論は、あの作品が描く小さな一世界にだけ通用しても——といってもそれは決して作品を支えるほど十分な倫理的指導原理にはなっていないが——スタインベックが他の作品にその知恵を用いて更に追求の旅をつづけようとする時において何の役にも立たないのである。せっかく真正面きって正しいと思える方向を狙いながら、いつもある地点で、もっとも肝心なものが落ちてしまい、思想の一貫性が失われるのである。同様のことは、『エデンの東』についても言える。Timshell という語によって、個としての人間存在そのものにかかわる善と悪、愛と憎の問題にまでほり下げながら、それが一体どのようにして『怒りの葡萄』の連帯性とつながるのか、善悪の認識に到達した一個の人間をどのように変えていくのか、などについては遂に何らの解決も与えていない。「個人の自由意志において善と悪とを選択する」という認識だけでは何らかの進歩を見出すことはできないのである。『エデンの東』で一応強い人間主義肯定の姿勢をとったスタインベックの後の作品に読者が期待するもの、それは、作品の最後で一つの明確な認識に到達したキャレブが、どのように自己に責任を持った生き方をし、『怒りの葡萄』の連帯へつながっていくのか、という問題ではないだろうか。『スタインベック論』の著者稲沢秀夫氏は、「結局、スタインベックの問題点は、『怒りの葡萄』と『エデンの東』をどう結びつけて考えるかにあるのではなからうか。」と述べて^(注6)

いるが、この言葉は、恐らく私が先に述べたことを意味するものであろう。しかしこの2つの作品の世界は、遂に結び合わされずに終わったように思える。少なくとも読者を納得させるような形ではなされなかった。小説が作家の倫理、人生感などを具象化していくのに具体的な背景と具体的な人物を用いなくてはならない以上、表面的に個々の作品に一見別々の結論や知恵がでてきても、それは当然であろうが、しかしそういう個々の結論や知恵は、矛盾し、時に反発しあい、重複しながらも作家の倫理感や人生観を反映し、同時にそれをより高次なものへと高められていくべきものであろう。ところがスタインベックの場合、個々の作品で抽象化されてしまった結論や知恵は、一つの大きな深い人生観に統一されることなしに、ばらばらのまま残されているように思う。それぞれの作品は、スタインベックにとって多くの場合、思索の行きづまりとなり、その結果、観念的傾向が前面にでてくる感が強い。スタインベックの正当な批評家ピーター・リスカ (Peter Lisca) は、その著『スタインベックの広い世界』(The Wide World of John Steinbeck) の中で、彼の文学は「高まっていかない」(doesn't add up)と繰返し言っているが、この言葉はそうした意味で理解すべきものであろうと思う。

次に『アメリカとアメリカ人』で問題にしたければならないもう一つの事柄は、「アメリカ人の特質を強調しすぎたために、普遍的に人間的な面が欠けている」ということであるが、これも先程述べたことと決して無関係ではない。即ちアメリカ人の特殊性の中に埋没して、人間の普遍性へ目を向けなかったことは、個々の作品で掘りさげた知恵を統一して大きな人生観とすることのできなかつたスタインベックの限界を明確に示すものであろう。祖国への愛着は、

すでに『月は沈みぬ』などの戦時中の作品あたりから『チャーリーとの旅』を通して常に見られるものであるが、この作品でも、その祖国愛は祖国愛のままで残り、それを通しての人間性への洞察がなく、それがこの作品の浅薄さの一つの理由になっている。

結局、これら2つの作品には、『エデンの東』で読者に期待を持たせた、個への深い沈潜もないし、従って『怒りの葡萄』へ通ずる連帯へのメカニズムの究明もない。底の浅い思索と、プロパガンダがあるだけである。

さて、これら2作品に見られるこのスタインベックの安直さはどうして起きたのであろうか。この問題の考察は、3回にわたった私のスタインベック研究の一応の結論となるであろう。

ピーター・リスカは、『気まぐれバス』あたりから如実に見えてきたこの気安さを、「墮落」(decline) とも言い、「変貌」(change) とも言っている。彼にいろいろなアドバイスを与えたエドワード・リケッツ (Edward Ricketts) の死(1948年5月)、サリーナス溪谷を捨ててニューヨークの俗塵に移り住んだこと、1943年に従軍記者として派遣されて以来続いていたジャーナリズムとの関係が遂に彼の作家的良心を奪ってしまったこと、等々をその理由に挙げている。たしかに常に知名人として、リラックスしたムードの中に暮らすスタインベックには、純文学を可能にする激しい生の燃焼は見い出すことができないように思える。

しかし特に後年の「墮落」や「変貌」は、すでもっと早い時期からある程度予見することのできる性質のものであったと思われる。つまり、リスカが挙げた表面的な理由よりも、もっと根元的な、内的な理由が彼の人となりそのものの中に見出せると考えるのである。それは一口

に言うとは問題意識の欠如である。ますます苛酷な生の条件下の人類を認識するための深く鋭い追求の態度や、その認識に基づいての人類救済への努力というような使命感の欠如である。前期においてそのような兆候は何篇かの作品に見られたが、それが統一のある結論に達しなかったことは既に述べた。

以上述べてきたように、スタインベックの世界に確乎とした人生観、倫理体系を認めることは不可能のように思える。文学の本質が「人生如何に生きべきか」という問題を常に追求するものである以上、スタインベックの文学を純度の高い文学とは言い難いであろう。しかし文学は、同時に人に歓びを与えるものでもあるから、彼が創り出した数多くの忘れがたい人物群は長く読者の記憶に残ることであろう。スタインベックの本質は、やはり短篇を得意とするストーリー・テラーということになる。彼の長篇が本質的に短篇の形式を用いていることは、『怒りの葡萄』、『エデンの東』の作品論で既に触れておいた。

Notes

1. *Travels with Charley* (Bantam Books, 1963) P. 3

When I was very young and the urge to be someplace else was on me, I was assured by mature people that maturity would cure this itch. When years described me as mature, the remedy prescribed was middle age. In middle age I was assured that greater age would calm my fever and now that I am fifty-eight perhaps senility will do the job. Nothing has

worked.

2. *Ibid.*, p. 5

In short, I was writing of something I did not know about, and it seems to me that in a so-called writer this is criminal. My memories were distorted by twenty-five intervening years.

3. *Ibid.*, p. 5

So it was that I determined to look again, to try to rediscover this monster land.

4. *America and Americans* (Bantam Books, 1968) p. 8

This essay is not an attempt to answer or refute the sausage-like propaganda which is ground out in our disfavor. It cannot even pretend to be objective truth. Of course it is opinion, conjecture, and speculation. What else could it be? But at least it is informed by America, and inspired by curiosity, impatience, some anger, and a passionate love of America and the Americans.

5. *Ibid.*, p. 178

We are in the perplexing period of change, We seem to be running in all directions at once—but we are running. And I believe that our history, our experience in America, has endowed us for the change that is coming. We have never sat still for long; we have never been content with a place, a building—or with ourselves.

6. 稲沢秀夫:『スタインベック論』(思潮社) p. 8
7. Peter Lisca: *The Wide World of John Steinbeck* (Rutgers Univ. Press, 1958) p. 284 以下